

越後古代図に見る津波記録の検証 ーその2ー

河内一男

§1. 寛治図の語る国の形

康平図あるいは寛治図と呼ばれる平安中期の越後国地図がある。現存する図は全て模写図であり、このこと自体は議論になり得ないが、史料価値があるかどうかの問題になってきた。添え書きの「大津波アリテ西北榎島始メ孤島打壊シ泥砂乗足島ノ東南ノ入海ニ注ケリ是ヨリ大ニ国ノ形ヲ一変セリ」は、大津波によって日本海上にあった榎島その他の「孤島」が打ち壊された様子を記している。地図は「粟穂」(粟島)の南西方に「榎木島」を配置している。この島は砂丘列に相当すると思われる「松濱」・「乗足」・「鳥屋野島」などの島々より明らかに外海側に描かれている。この島の延長の南西方には角田山から佐渡島に向かう半島状の地形が見える。これは「一変する」前の「国の形」を描こうとしたものと解される。

§2. 被害地震と日本海上の孤島

北海道南部から東北地方・新潟県地方にかけての本土の沖合にある島は、いずれも被害地震の震源域に分布している。北から列挙すると、

- (1) 奥尻島：1993年北海道南西沖地震(M7.8)
- (2) 渡島大島：1741年渡島大島の地震(M6.9)
- (3) 久六島：1983年日本海中部地震(M7.7)
- (4) 飛島：1833年庄内沖地震(M7.5)ほか
- (5) 粟島：1964年新潟地震(M7.5)ほか

などである。これらの島々の存在・分布位置は日本海東縁の地震時・地震間の地殻変動や地質学的スケールの構造運動と密接な関係があるものと考えられる。言い方を変えると、上にあげた地震より古い時代のもも含めて、これまで繰り返されてきた地震活動によって島々の消長はあったはずで、現在の島々以外にも日本海上に「孤島」の存在した可能性がある。

§3. 寛治図を支える資料

- (1) 史料「三代実録」

貞観五年六月十七日、越中越後等地大震、陸谷易處、水泉涌出、壊民廬舎、壓死者衆

- (2) 寺社の由来記

いくつかの寺社の由来記は越後国大津波を語っ

ている。例えば「紫雲寺新田由来記」、「湊神社由来」、「円福寺伝説」などがある。

- (3) 地名

図中の寄居潟はかつての鎧潟を指している。与田は与板である。江戸期以降の文献にはない地名であり、これだけでもこの地図が江戸期よりも古い時代の伝承を含んでいることを示している。

§4. 「地形一変」の可能性

海底地形図(図1)は、柏崎市と新潟市の2方面から-200mの海底の高まりが佐渡島方向に延び、佐渡島からの-200mの高まりと数kmの距離で向かいあうことを示している。本論では「地形一変」の可能性を(1)最終氷期の最大海面低下量140m、(2)地殻変動速度の最大見積もり10mm/yr、(3)海退時の砂丘形成能力、(4)2000yrB.P.頃のLost sand duneなどを踏まえて検討した。佐渡-越後間の日本海に島々や半島状の地形を記した康平図は2000年前から1000年前頃の越後・佐渡の国の形を描こうとしたものであろう。

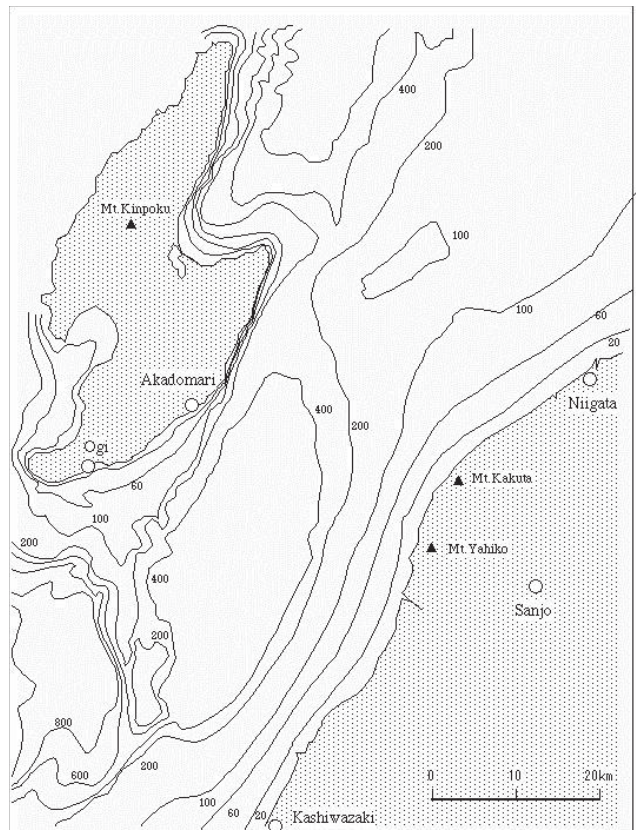


図1 佐渡-越後間の海底地形(国土地理院20万分の1地勢図による。単位はm)